もつホメオパシーなど通常の医学史では軽視されがちな対抗文化についても必要な紙幅を割いている。

とはいえ、本書の第一の価値は、西洋の中では遅れた自然主義的医学から、およそ一世紀半ほどの間に世界最先端の医科学へと変貌したアメリカ医学の学問史的検討にある。アメリカ医学の発展に多大な影響をおよぼしたアメリカ医師会（AMA）やロックフェラー財団、カーネギー財団の活躍などアメリカ合衆国らしい医学振興や医師の地位確立といった社会的側面に触れながら、医学理論と治療の進歩について丹念な検証を行っている点では類書を圧する。なお、敢えて難をいえば、エレミュエル・シャタックらによって先導された衛生改革をはじめとするアメリカ公衆衛生の展開について、もう少し論じてもよかったのではあるまいか。ダフィーの得意とするところだけにかえって抑制的であったのかもしれないが、望蜀の類であろうか。

最後になったが、訳業について賞賛を惜しむことはできない。さなきだに長編の研究書であるのにもかかわらず、訳者の網野はきわめてわかり易い邦語訳を行っている。テキストに忠実であるとともに、アメリカ医学についての深い造詣がなければできない訳業である。特に、訳注はアメリカ医学の専門外の人間にとってアメリカ医学の全容が理解しやすいように工夫されている跡がよくわかる。本書がもし多くの人に手に取られるとするならば、そしてそうあれかしと切に願ってやまないが、それは原書のもつ珠玉の価値とともに、訳業の精巧であることにまた多くを負っているといわねばなるまい。

（瀧澤　利行）

〔二瓶社、大阪市住吉区山之内二―七―一、電話〇六―六六九三―四一七七、二〇〇二年十月、A五判、四六九頁、本体四八〇〇円〕

篠田　達明　著

『モナ・リザは高脂血症だった』

ある物事を医学的観点から眺めたり、分析すると意外な一面が現れ――、ときには露呈されるので興味が尽きない。本書はそうした一冊で、筆者の篠田達明氏は整形外科の専門医にして、数々の小説を発表している作家である。

本書のサブタイトルは「肖像画29枚のカルテ」である。肖像画を患者にみたてカルテを作成しようという意欲的な試みに満ちている。

歴史的に有名な人物の肖像画や彫像について、筆者は「それぞれの人物の表情や体形が克明に写しだされる。絵には生命があり、描かれた人物もまた生命体であるからには生老病死がそこにあらわれぬはずがない」と書き、絵画として鑑賞するだけでなく、医学的見地から検証すれば、そこに隠された情報を読みとることができると考える。

姿やしぐさを窺うだけで診察する法は西洋医学では視診といい、漢方では望診という。いわばこの診察方法で著名人を検証する。

冒頭は「モナ・リザは高脂血症」である。レオナルド・ダ・ヴィンチ作になるこの有名な肖像画の左の目頭には黄色いしこりがある。この部分を拡大鏡で観察すると米粒の半分ぐらいと粟粒ぐらいの大小二個の丘疹が連なっている。この丘疹は高脂血症から生じた黄色腫ではないかと欧米の医学者のあいだでも話題になっている。生活習慣病である高脂血症は、血液中にコレステロールと中性脂肪のいずれか、または両方が過剰になった状態である。ダ・ヴィンチのリアリズムが高貴な女性の病状を明らかにする。また、上唇の右側にアフタ（口内炎）を思わせる小さな発疹らしきものもある。モナ・リザは消化不良を起こしているのかもしれない。ただ、一部の皮膚科医の指摘では、この丘疹は母斑（ぼはん）の変種の可能性もあるという。一枚の絵からの診断は当然限界がある。

「肖像画カルテ」は日本の戦国武将たちにも及ぶ。

まず、織田信長は「本態性高血圧」と見立てる。これはルイス・フロイスのこした『日本史』のなかの記述により、性急で激昂し易い性格が窺えるところから推察している。尾張地方の塩分の多い食事、戦争に明け暮れたストレスにより血圧は上がらざるを得なかった。

豊臣秀吉は「先天性多指症」と診る。狩野光信画になる高台寺（京都）の秀吉像は屏風を背景に座る絢爛豪華な肖像画である。フロイスは「片手には六本の指があった」と記述していて、その観点から秀吉像を見直すと、両手を極端に小さく描いた上に、六本指を目立たなくするため、右手の母指を笏で隠している。

徳川家康は「驚愕反応」である。「三方ヶ原戦役画像」（別名、顰（しかみ）像）は武田信玄に三方ヶ原の戦いに敗れ、命からがら逃げたときの絵で、肖像画には珍しく正面を向いている。両目が突出し、口をへの字にあけて、片手で顎を支え、片膝を不安定に組んでいる。恐怖に震えて驚愕反応に襲われている。敗戦を忘るるなかれの意味で描かれた肖像画である。

本書には他に、宮本武蔵の巨人症、平清盛の電撃性猩紅熱、ニコチン中毒だった平賀源内、ドラキュラのポルフィリン症など興味をそそる項目があるが、ここでは書かない。本書を手にとり、著者の医学的推理を満喫するのが一番の楽しみ方であろうと考える。

（山崎　光夫）

〔新潮社、東京都新宿区矢来町七一、電話〇三―三二六六―五四三〇、平成十五年九月二十日、新書判、二〇六頁、本体六八〇円〕